

「手塩に掛ける」



京都市消防局長 山内 博貴

新しい「令和」の時代が幕を開けました。京都市では、文化庁の全面的な移転を控え、これまでの文化を基軸としたまちづくりを一層加速させながら、課題や危機に対する強靱性や復元力を高めるための取組を推し進めております。

振り返りますと「平成」の時代は、大規模な自然災害の多発、テロ災害への対処、救急の高度化など、社会構造の変化、更には地球環境にも対応すべく、消防に課された使命と責任は拡がり続け、それに伴って、消防に対する国民の期待・信頼が一層増した時代でありました。

新たな時代も、救急需要対策、火災予防上の課題、消防団・自主防災組織の強化などに適切に対応し、社会情勢・科学技術の進歩に合わせて、消防力の総点検と消防防災体制の整備を図りながら、今後発生が予測される南海トラフ地震などの自然災害に備える必要があります。

京都市では、これまでの災害等から得た教訓を、ソフトとハードの両面から、しっかりと未来に活かし、人口減少、地域力の低下、その他の見えない危機に対し、よりしなやかで、強靱なまちづくりを目指す『レジリエントシティ』の取組と、「誰一人取り残さない」持続可能な開発目標『SDGs』の理念を融合させ、京都の次の100年後を見据えて持続・発展し続けられる「災害に強いまちづくり」に取り組んでいます。

消防のこれからの課題と将来を見据え、総合的な消防力の充実・発展を図っていくためには「良き消防人材の育成」が、その根底に常にあることを忘れてはなりません。

京都市消防局の令和元年度の運営方針では、「やりがいのある職場づくりと公私の自己研さん」「後継者の育成」を掲げ、職員の「能力×熱意×行動」を掛け合わせた「チーム力の向上」こそが、消防の使命を全うするための原点であることを、全職員の共通認識として示しています。

事を成し遂げ、将来へとつなげていくには、何事も「いい塩梅」で行っていくことが大切であると言われています。特に人材育成については、誰しもが、指導方法の加減を幾度も思案し、すぐに成果が上がらないことに悩み、反省を繰り返されたことがあるかと思います。一方で、根気よく、大切に育てた職員の成長・活躍を実感できたときは、自分のことのように嬉しかったのではないのでしょうか。

当局では、団塊世代の大量退職により、ここ10年あまりで職員の約半数が入れ替わり、これと同じ期間、技能伝承という課題にチャレンジし続け、職場教育に力を注いでまいりました。最近では、これらの職員が、自ら活躍できるフィールドを拡げていきたいと、予防業務や管理業務に手を挙げ、熱意を持って取り組み、チーム力向上に貢献する人材となってくれています。

新しい時代が始まり、消防に対する国民の期待もより一層高まるなか、我々消防は、その信頼と負託にしっかりと応えるべく、『手塩に掛けて』人材の育成に取り組み、全国の消防各位とともに『安心・安全のまちづくり』の実現に向け、引き続き前進してまいります。